

Me time と人称代名詞の一考察

竹中裕貴

0. はじめに

まず, 以下の漫画 *Mother Goose & Grimm* を見られたい。



(<http://www.grimmy.com/>)

Mother Goose が, 猫の Attila に, 膝の上にのらないかと誘っている場面であるが, その次のコマでは, その誘いに (1) のように返している。その中でも, *me time* という表現が興味を引く。

- (1) No thanks, I think I'd like to have a little "me time" today.
(遠慮しておくよ。今日は ちょっと "me time" がほしいんだ。)

Grimm は, 最後のコマで, "... For the 827th consecutive day." (・・・連続の 827 日目だね。) とあきれているようであるが, はたして *me time* とは正確にはどのような意味をもつ表現なのだろうか。また, 人称代名詞の目的格であるはずの *me* が名詞の前に置かれ, 形容詞のように振る舞っているが, これはどのように分析すべきなのであろうか。

本稿では, まず *me time* を中心に, その定義について考察した後, この表現を構成する代名詞 *me* の様々な用法について概観することで, この表現が持つ言語文化的意味について論じていく。代名詞は, 一見, その用法が確立し, 安定したものであるかのように思われるが, 実際には, 地域的, あるいは機能的要因によって変異が生じ, 用法の拡張が起こっている。このような

代名詞の特徴を「代名詞の揺らぎ」及び「代名詞の弾性」と呼ぶことで、特に現代アメリカ英語における代名詞の用法の多様性を捉えていきたい。¹⁾

1. *Me Time* の語彙的位置づけ

まずは、この *me time* という表現が語彙的にどのように位置づけられるのか、その定義について考えてみたい。筆者の調べでは、*OALD8*においては、第8版(2010)において初めて辞書に採録され、(2)のような定義が与えられ、(3)の用例が挙げられている(以下、引用文中のイタリックは筆者によるものである)。

(2) time when a person who is normally very busy relaxes or does something they enjoy

- (3) a. The spa is popular with women who want a bit of *me-time*.
b. *Me-time* needs to be part of your regular routine.

(2)の定義によれば、「日常的に非常に忙しい人間がリラックスしたり、楽しむことをする時間」となる。上記 *OALD8* の用例(3a, b)において、*me-time* とハイフンを用いる複合語として使用されていることにも注意されたい。

また、同じように、*Macmillan Dictionary* (<http://www.macmillandictionary.com/dictionary/british/me-time>) [*MD*]にも、同じように(4)の定義があり、*me* と *time* が分離された形で(5)のような用例が挙げられている。*OALD8*の定義と比較すると、*rather than* 以下の部分で *me* と *other people* との対立が明確になっている。

(4) time that you spend relaxing and doing things that you enjoy rather than time spent doing things for other people—*MD*

(5) Like most parents with young children, I don't get much *me time*.—*Ibid.*

すでに言及した *Mother Goose & Grimm* のようなアメリカの漫画という誰しもが目にする媒体に現れた表現であることから、*me time* は、アメリカ言語文化内では一般的な表現となっていることは間違いないが、英英辞典を含め、英和辞典においても、独立した語彙項目としてその定義を挙げているものは今回の調査ではほとんど無く、2000年以後の新しい語句として広がりつつある語彙項目であるという位置づけができる。

さらに、辞書における扱いを見ていくと、オンライン上の辞書には、その定義をしているものが幾つかある。*Urban Dictionary* には、様々な定義と用例が乱立しているため注意が必要だが、以下に一例を取り上げておきたい。

- (6) one's own personal time to be alone

“Can you do this for me?”

“Naw, I need some *me time* right now.”

(<http://www.urbandictionary.com/define.php?term=me-time>)

また、日本語のオンライン辞書である *SPACE ALC* には、以下のような定義が見つかるが、その語源に踏み込み、特に女性との関わりがある表現であるという点が注目される。

- (7) 自分だけの時間、好きに使える時間◆特に女性が◆家事と仕事の両立で多忙化している
21 世紀の女性たちが自分に優先順位を置き、バスタイムなどリラックスのために時間を割くようになったことから生まれた言葉。

(<http://eow.alc.co.jp/search?q=me+time&ref=sa>)

上記の定義と関連し、*Why is me time such a big deal?* と題した *CNN* の記事で、女性と *me time* の関係について、以下のような記述がある。タイトルは小文字で綴られているが、本文では、*Me Time* となっている。

- (8) Too many women, single or married, childless or mothers, are endlessly fulfilling every obligation except the one to themselves. For your mental, physical, and psychological well-being, you sometimes just need to stop. Then you need to do something you want to do. You need to take some *Me Time*.

(<http://edition.cnn.com/2006/HEALTH/09/15/me.time.health/>)

OALDS の用例についても、上記の記述と整合性のある例が示されているが、女性について言及する言葉として現れた表現が、現代アメリカ英語では、特に女性に限らず、日常的に（あるいは一時期に）忙しくくつろぐ自分の時間とれない人について言及する表現になっていると考えられる。

USA Today には、以下のようなタイトルの記事で、クリスマス直前のプレゼントなど買い物で忙しい人々に、*me time* を持つことの意味を伝えている。

- (9) Final Word: Buying some ‘*me*’ time amid shopping chaos

(<http://usatoday30.usatoday.com/life/columnist/finalword/story/2011-12-21/final-word-craig-wilson/52131864/1>)

また、*The Wall Street Journal* では、自分の為の時間をどのように見つけるかという問題について、(10) のようなタイトルで記事を書いているが、その中で、(11) のような読者の声が取

り上げられている。なお、(11) では、主語の *You* と呼応し、*me time* ではなく *you time* となっていることに注意されたい。

(10) How to Find Some *Me' Time*

(<http://online.wsj.com/news/articles/SB119674116467412879>)

(11) “You have to make the time: 5:30 a.m. running, monthly book group, lunch with friends. It’s not that hard. It’s the guilt that makes you feel like you can’t get any ‘you’ time.”—*Ibid.*

以上、最新の英語において、*me time* がどのように語彙的に定着してきているかを例証してきたが、以下、この表現の文法的位置づけして、*me* の使用の広がりについて、まとめておきたい。

2. *Me* の文法的位置づけについて

Me time という表現を考える場合に、文法的な問題として、*my time* のように所有格を用いるべき位置で、目的格の *me* が用いられているという説明が可能であるが、果たして、そのように単純な言語現象なのであろうか。²

代名詞においては、格 (case) の「揺らぎ」が生じることが多々ある。以下、主として *me* に絞り、現代英語におけるその文法的位置づけをまとめておきたい。

代名詞の格を巡る古典的な語法の問題は、*It is I* と *It’s me* との間の「代名詞の揺らぎ」である。以下の例では、「文法的に正しい」とされる *I* を用いたことが逆に間違っているのではないかと思いを巡らせていることが興味深い。³

(12) “Is that you, Hermie?” “It is *I*.” He struggled with the thought of bad grammar at a time like that, wondering if it shouldn’t have been “me” and not “I.” Pronouns had never been his strong point. Especially when they were proper nouns or possessives or other things along those similar lines.—H. Raucher, *Summer of ’42*, 1971, Dell Books, p.133

この文脈は、思春期にある Hermie が、年上の女性宅を一人で訪れ、大人ぶるのであるが、緊張のあまりに言葉遣いが乱れる場面である。その出だしで、問題の表現が用いられている。この作品は、1970年代のものであるが、この時点で、*It’s me* は口語的なものとして十分定着した表現となっている。現時点で、代名詞で打ち切り形式では、目的格の方がますます一般的になってきており、特に、一人称の場合に *I* がくる形式は非常に堅苦しい言い方となり、学者ぶった (pedantic) 響きがあると言われている。⁴

以下の例では、ある女性が庭で見つかった少女たちの死体について尋問を受けている場面であ

るが、その女性がかつて英語教師をしており、ここでは単数と複数の選択にこだわっているが、三人称代名詞で、いずれも主格を用いていることに注目しておきたい。そして、(13a) の後の文脈 (13b) では、一人称についても *I* を用いている。言葉づかいに敏感な Ed McBein が、作品の登場人物の特徴づけに巧みに代名詞の格の選択を利用していると考えられるが、元英語教師の *pedantic* な響きを感じとれる例である。

- (13) a. “Tell me what happened,” I said. “When?” “On the day they discovered the bodies.” “It wasn’t *they*, it was *he*.”—Ed McBein, *Mary Mary*, 1992, Warner Books, p. 4
- b. “But it wasn’t you.” “It was not *I*.” “You did not bury any of those girls in my garden.”—Ed McBein, *Mary Mary*, 1992, Warner Books, p. 8

こうした主格 (nominative) と対格 (accusative) の間の「代名詞の揺らぎ」について、Huddleston & Pullum (2002: 458) では、その背後にあるスタイルを以下のようにまとめている。

- (14) There are a number of constructions where the nominative is associated with formal style, the accusative being strongly preferred in informal speech and writing. Because of the tendency of older prescriptive grammar to accept only formal style as ‘grammatically correct’, there has been a tradition of criticizing the accusative alternatives, and the stigmatism attaching to such accusatives has given rise to a certain amount of hypercorrection, with nominatives being used in constructions where the traditional rules call for an accusative.

しかしながら、現代英語においても、単にスタイル上の問題で自由に 2 つの形式が選択されるのではなく、その「代名詞の揺らぎ」が生じやすい統語環境が存在する。Huddleston & Pullum et al. (2002: 459) が指摘するように、一般に、代名詞が単独で主語の位置を占める場合には、主語に目的格をとる文は非文法的であると判断される。

- (15) a. *I* made up some new curtains.
b. **Me* made up some new curtains.

他方、同じ主語に来る場合にも、等位接続詞の *and* で結ばれる場合には、依然としてくだけた言い方となるが、容認度が緩和されるようである。しかしながら、(16a) と (16b) では、*me* が文頭に来る (16b) の方は、非標準的であると強く非難されることが多い。[Cf. Huddleston & Pullum et al. (2002: 463)]

- (16) a. John and *me* are going skiing this weekend.—Swan (2005:404)
 b. For a while, we lay face-to-face while I suffered his meaty breath and he thought about life. *Me and dogs* always seem to end up in relationships like this.—S. Grafton, “*O’ Is For Outlaw*, Ballantine Books, 1999, p.22

さらに、代名詞が並列される例も散見される。しかし、以下の例では、前文の *come* の使用や *be* 動詞が単数呼応しており、非常にスピーチレベルが低いことが窺える。

- (17) He shook his head, pulling at his chin. “I don’t think he come out too good on that. *Him and me* has the same insurance comp’ny, but his policy didn’t amount to much as I understand it.”—S. Grafton, ‘*B’ Is For Burglar*, Bantam Books, 1986, p.62

代名詞が分裂文に生じる場合には、主格は一般に（非常に）堅苦しい文体に限られ、対格の方が一般的であるとされる。ただし、*who* が省略された (19) の用法は、非常にくだけた言い方に限られる。

- (18) It wasn’t *me* who offered to go, it was him.—*CIDE*
 (19) “It’s not *me* wants you to drink, but it’s the drink wants you to drink. You know what I’m saying?”—L. Block, *Even the Wicked*, Avon Books, 1997, p.148

分裂文でも、代名詞が後続文の動詞の目的語となっている場合には、目的格を用いるのが普通の方法で、主格を用いると非常に堅苦しい言い方となる。ただし、*who* あるいは *that* が省略された (20) のような例は、非常にくだけた言い方に響く。

- (20) It’s *me* she wants to talk to, not you.—*CEED*

この他、(21a) のような構文では、主格を用いるのは容認度が下がると判断されている。特に、(22a) のように、前置詞句が後続する場合には、非文法的となる。[Huddleston & Pullum et al. (2002: 459)]

- (21) a. ?The only one who objected was *I*.
 b. The only one who objected was *me*.
 (22) a. *This one here is *I* at the age of 12.
 b. This one here is *me* at the age of 12.

以上、網羅的ではないが、単文における「代名詞の揺らぎ」を少し見てきたが、以下のように代名詞が談話の中で単独で現れる場合には、主格が生じる可能性が低くなり、主格の方が有標表現となる。省略表現そのものがくだけた文体の表示となり、それに呼応して代名詞の形式が選択されている。

(23) Who wants to try it first?" "Me."—*CEED*

以下の例のように、*Me too* の代わりに、*I too* が用いられるのは極めて特殊な例であると言えよう。⁵⁾ この文脈では、先行する Teresa が、緊張のあまり言葉の選択に戸惑い、*I* を繰り返して用いたことに引きずられて、Craciela も思わず *I* が出てしまったと考えられる。

(24) Sister Teresa was the first to speak. "I—I will have some coffee and bread, please."
Sister Craciela said, "*I, too.*"—S. Sheldon, *The Sands of Time*, Warner Books, 1988,
p.79

構文形式と代名詞の格形式の選択に関連して、当初 *Mad Magazine* で用いられて、その後一般的となった以下の表現も興味深い。(Akmajian et al., 2010: 306)⁶⁾ 具体的な文脈は与えられていないが、いずれも相手の発話に対して疑念や批判を表す修辭疑問となっている。(25a) と (25d) では、(15b) で非文法的とされた目的格の主語が用いられていることに注意されたい。*Correct grammar* の観点からは、教養のない英語の変異形として位置づけられるかもしれないが、動詞の原形の使用と相まって、感情表出にふさわしい表現形式となっていると言えよう。⁷⁾

- (25) a. What, *me* worry?
b. What, John get a job? (Fat chance!)
c. My boss give me a raise? (Are you joking?)
d. *Him* wear a tuxedo? (He doesn't even own a clean shirt!)

以上、*me* を *I* として用いる言語現象を見てきたが、何故こうしたことが生じたのかという言語学的説明として、Fries (1940: 91) は、*It's me* について、「語順の圧力」(the pressure of word order) という概念を用いて、以下のような説明をしている [また、文型の力 (pattern pressure) という観点からの 安藤・山田 (1995) による分析もその理解の一助となる]。

(26) From sixteenth century to the present here there has been considerable diversity of usage in the matter of the inflectional forms of these pronouns in predicative positions with unconscious colloquial practice yielding to the pressure of word order.

本稿では、この「語順の圧力」(the pressure of word order)の考え方を拡大し、等位接続の場合や省略表現における *me* の使用なども勘案し、広く「構文の圧力」(the pressure of construction)、さらに「談話の圧力」(the pressure of discourse)という概念で説明しておきたい。*I*の代わりに用いられる *me* は、その口語的な響きとともに、非常に柔軟な言語表現として存在し、「構文の圧力」(the pressure of construction)や「談話の圧力」(the pressure of discourse)に対応する形で、*I*の様々な領域に入り込んでいるのである。

*me time*の場合、*my*の代わりに *me*が選択されたとする説明は、上記の「語順の圧力」(the pressure of word order)の原理からしても、逆行した言語表現となり、*me time*の *me*は、*my*の代用ではなく、*I*の代わりに *me*が用いられていると解釈すべきである。すでに挙げた(8)の例においても、主語が *you* となった例では、*your time*ではなく、*you time*が使用されていたことを思い起こしていただきたい。従って、*me time*の訳語としても、日本語でもまだ定着していないが、「私の時間」とするとそのニュアンスが感じにくく、直訳の「わたし時間」とする方が、この表現の持ち味を反映している。この「わたし時間」を使って、入浴などにゆっくりと時間をかけたり、その他、リラックスするために何か自分の好きなことをするのである。

このように、*me time*は、*I*の代わりに *me*が用いられるという一般的な言語学的傾向に支えられた表現と言えるが、この表現が使いだされた背景には、別途、考慮すべき言語文化的素地が存在していると考えられる。次節で、こうした言語文化的素地を見ておく。

3. *me time* の言語文化的素地 : *me generation*, *me decade*

1970年代や1980年代に「自己中心的」な社会的風潮が流布し、*me*がそのような社会的背景を背負った形で、*me generation*や*me decade*といった表現が定着していった。⁸⁾これらの表現は、1990年代に出版された英米の辞書ですでに語彙項目となっている。*LDEL*Cの第2版(1998)では、*me generation*を以下のように説明している。また、用例については、*OALD*第8版のものを挙げておきたい。

(27) (*often cap. M*) (especially in the 1970s and 1980s) a group of young people who are selfishly concerned only with their affairs and interests, and pay no attention to the lives and problems of other people—*LDEL*C, s.v. ***me generation***

(28) *The me generation* was one of the legacies of Thatcherism in Britain.—*OALD*8

同様に、その1980年代と1980年代は、*the me decade*と称され、以下のような用例が見受けられる。

(29) The 1980s were considered *the me decade*.—*RHWD*AE

さらに、実際の用例をみると、様々な用法や変種が見つかる。(30)を見ると *me* がさらに 2 つ追加され、「自分本位」という意味が強調されているようである。⁹⁾

(30) Millennials: *The Me Me Me Generation –Time*

(<http://content.time.com/time/magazine/article/0,9171,2143001,00.html>)

以下の *USA Today* の記事では、定冠詞 *the* を伴って、*The “Me Generation”* とあるし、また、新たに *the “We Generation”* という新語を生み出していることも分かる。

(31) *The “Me Generation” is morphing into the “We Generation.” There might be no better example than Microsoft co-founder Bill Gates, whose do-good assets doubled last month when Warren Buffett, 75, pledged \$31 billion to the Bill and Melinda Gates Foundation. Gates, 50, likely will spend more of his life at his foundation, working to eliminate diseases around the world, than he did running Microsoft, which he is leaving to the stewardship of others.*

(http://usatoday30.usatoday.com/news/opinion/editorials/2006-08-02-we-generation-edition_x.htm)

以上のように、*me* という表現に、「自己中心的」なというアメリカ社会の状況が色濃く反映された意味が連想されるようになると、*me* がさらにその意味的弾性を増したことは間違いない。そしてさらには、本稿で最初に取り上げた、*me time* という表現も生み出されることとなる。ただし、*me generation* における *me* と、*me time* における *me* では、違いが見られる。前者が、「自己中心的な」と解釈されるべきなのに対して、後者は「自分のための」となり、マイナスのイメージには結び付かない。これは、それぞれの表現が生み出された社会的背景が読み込まれた結果であり、そのような背景の解釈無しには、表現の意味が正確に把握できないということである。

4. おわりに

本稿の冒頭に挙げた漫画において、Attila は「今日はリラックスできる自分だけの時間がちょっとほしい」と言っていたのであり、一方で毎日のように *me time* を楽しむ Attila を、Grimm は「827 日連続」として皮肉っていたわけである。そして、本稿では、この *me time* の現状を記述するとともに、この *me* が用いられる文法的背景、さらには言語文化的背景を論じた。

me time という表現は、まず、その背景に *me* を巡る「代名詞の揺らぎ」があることが分かる。主格ではなく対格が無標の用法として確立していく中で、新たな語句を派生するための下地が確立したと考えられる。こうして、形容詞化した *me* も一般化して用いられることになり、

アメリカ社会の状況を反映しつつ柔軟にその意味を拡大させ、 *me generation* や *me time* のような日常的に使用される表現を生み出す中で、「自己中心的な」や、「自分のための」などの形容詞的用法を獲得することになったのであろう。

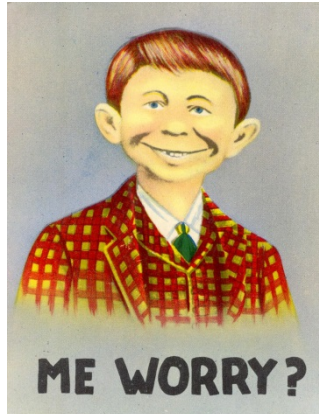
本稿で示したように、社会的背景を踏まえただけで、今、現代英語に何が起きているのかをつぶさに観察し、そしてその変化を実例に基づいて客観的に記述すると共に、その背後にある言語学的原理を探っていくことが筆者の目指す言語文化的アプローチの英語分析である。言語の社会的・文化的側面と言語自体の本質的な原理の両面を理解して初めて一つの言語事実を解明できるのである。

代名詞だけに限っても、*we* や *you*, そして *he, she* に関しても、古く新しい問題が多々あるように思われる。残された問題については、今後の研究課題としたい。

注

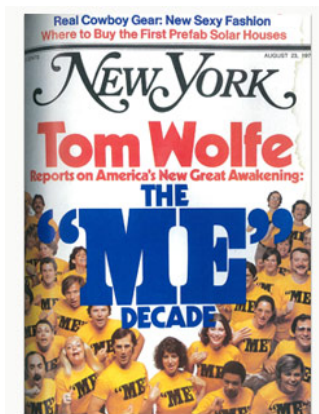
- 1) 本稿の執筆のきっかけとなったのは、島根大学・島根県立大学名誉教授である山田政美先生からの私信で「代名詞は面白いですよ」という言葉と、すでに示された様々な代名詞を巡る研究成果であった。山田先生にこの場を借りて深く感謝したい。
- 2) 次のように、*me* が所有代名詞的に名詞に先行する場合について、発音面やスコットランド・アイルランド方言の影響があるという説明もあるが、本稿では、その指摘にとどめておきたい：The unstressed pronunciation of *my* is sometimes represented in fictional dialogue by the spelling *me*: ‘*Me* brother Sam gives it another twelvemonth, m’m.’ [James Lees-Milne, *The Fool of Love*] (Weiner, 2000:108) / The use of possessive *me*, as in *It’s me cap*, is occasionally found in historically isolated varieties which have some Scots-Irish influence. (W. Wolfram & N. Schilling-Estes, 1998:342)
- 3) (12) の例の所在についてご教示いただいた島根大学外国語教育センター廣瀬浩三教授に、この場を借りてお礼申し上げます。
- 4) Cf. Partridge (1999: 162)。
- 5) 次の “*Me neither*” でも同様に、ここでは、**I neither*. は通例用いられない：“I don’t know.” “*Me neither*.”—*OALD8* [Cf. “I can’t understand a word of it.” “Neither can I.”—*ibid.* [**Neither do me*.] (*OALD8* s.v. **NEITHER adv.1**) 次の “Why me?” にも注意：“I would like you to go?” “Why me?”—*ibid.* (*OALD 8*, s.v. **WHY adv.1**)

6)



(http://en.wikipedia.org/wiki/File:Alfred_E._Neumann.jpg)

- 7) 以下の Quirk et al.(1985:838) の例とも比較されたい: A: I hear you're a linguist. B: *I a linguist!* <formal> / *Me a linguist!*
- 8) *Time* <http://content.time.com/time/magazine/article/0,9171,2143001,00.html>
- 9) 次のような雑誌が刊行されたのも、時代背景を反映した象徴的な出来事と言える。



(<http://nymag.com/news/features/45938/>)

参 考 文 献

[辞書・論文・研究書]

Chambers Essential English Dictionary. Edinburgh: Chambers. 1995. [CEED]

Cambridge International Dictionary of English. Cambridge: Cambridge University Press. 1995. [CIDE]

Longman Dictionary of English Language and Culture, 2nd ed. London: Longman. 1998². [LDELCD]

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 8th ed. Oxford: Oxford University Press. 2010. [OALD8]

Random House Webster's Dictionary of American English, New York: Random. 1997.
[RHWDAAE]

Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer, and Robert M. Harnish
(2010). *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*. 6th ed.
Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Fries, Charles (1940) *American English Grammar*. Maruzen Asian Edition. Tokyo: Maruzen-
Partridge, Eric (1999). *Usage and Abuse: A Guide to Good English*. 3rd ed, Revised by
Janet Whitcut. London: Penguin Books.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985), *A
Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the
English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wolfman, Walt and Natalie Schilling-Estes (1998), *American English*. Oxford: Blackwell.

安藤貞雄・山田政美 (1995), 『現代英米語用法事典』 研究社.

[インターネット資料]

CNN <http://edition.cnn.com/2006/HEALTH/09/15/me.time.health/>

Macmillan Dictionary <http://www.macmillandictionary.com/dictionary/british/me-time>

Mother Goose & Grimm <http://www.grimmy.com/>

SPACE ALC <http://eow.alc.co.jp/search?q=me+time&ref=sa>

The Wall Street Journal <http://online.wsj.com/news/articles/SB119674116467412879>

Time <http://content.time.com/time/magazine/article/0,9171,2143001,00.html>

Urban Dictionary <http://www.urbandictionary.com/define.php?term=me-time>

USA Today <http://usatoday30.usatoday.com/life/columnist/finalword/story/2011-12-21/final-word-craig-wilson/52131864/1>

Wikipedia http://en.wikipedia.org/wiki/File:Alfred_E._Neumann.jpg

(たけなか ゆうき・島根大学外国語教育センター准教授)